高齢者等が一人でも安心して暮らせる コミュニティづくり推進会議	
第２回(H.19.12.11)	資料３

千葉県松戸市
常盤平団地自治会
中沢卓実氏資料

事例報告「常盤平団地における『孤独死ゼロ作戦』の取り組み」

千葉県松戸市　常盤平団地　自治会会長　中沢　卓実

◇講師のプロフィール◇

1934年2月7日生まれ。23年前の創刊当時から「月刊myふなばし」編集長・松戸市の常盤平団地自治会会長を通算22年。松戸市社会福祉協議会理事。

12年前に団地地区社協を立ち上げ、5年前から「孤独死の課題」に挑む。この4月15日に団地内の店舗を借りて「いきいきサロン」を開設して現在に至る。

孤独死の課題に取り組むことにより、地区社協の重要性を理解。現在も船橋と松戸を舞台に“2足のわらじ”稼業。

1．教育の分野にも広がる孤独死の課題

- 江戸専における授業と今回の福祉フォーラム
- 文科省が聖徳大学に委託した「孤独死の調査研究」
- 日本女子大学で講演（11/16）
- 淑徳大学で講演（12/21）

2．国際的な広がりをみせる傾向

- 韓国MBSテレビで放映
- イギリス『ザ・ガーデァン』紙に掲載（4/17）
- ロイター通信取材ずみ

3．なぜ、こんなに孤独死の課題が広がるのか

① 社会的な背景
② 住民主導で初の事例
③ 地域福祉の重要な課題
④ 孤独死の事例から学ぶ
⑤ 国も“小さな扉開く”

4．常盤平団地における孤独死ゼロ作戦の取り組み

- 孤独死を考えるシンポジウムの開催
- 孤独死１１０番
- まつど孤独死予防センター
- 孤独死の早期発見・早期対応（安否確認等）
- 「向こう三軒両隣」呼びかけ（通報、あいさつの推進等）
- 会報「ときわだいら」等の定期発行
- その他（リーダーの役割）

5．「いきいきサロン」の開設

- 前例のない経営
- 明るい表情に変化（人の和、地域の和）
- 集団で見学来場者
- 知り合い仲間づくりの拠点

6．孤独死から学んでいかすこと

- 人間「どう死ぬか」それは「どう生きるか」という生き方の課題と関わっていることを再確認
- 人間の死亡率は１００％
- 人間、命、人生など改めて考えるキッカケに
- 死は選べないが、生き方は選べる
- 人生４つの道のり
- 地域ぐるみで福祉のまちづくり

「孤独死ゼロ作戦」5年目の総括

2007年12月10日
常盤平団地自治会
常盤平団地地区社会福祉協議会

（はじめに）

常盤平団地で孤独死の課題に取り組むキッカケになったのが、2001年春に発見された、いわゆる「白骨死体3年経過」という出来事でした。

団地１DKのダイニングキッチンの板の間で白骨死体となって発見されたAさん（男性、69歳）は、家賃を自動振替落としで払っていました。発見された時、警察署で検死の結果、「死後3年」ということでした。貯金が底をつき、家賃不払いとなり、現在の都市機構松戸住宅管理センターが家賃催促を出しても戻ってくることとなり、担当者がAさん宅を訪問して、警察署に連絡、Aさんの白骨死体を発見したという経緯をたどっていました。

この時のAさん宅は１DKの家賃31,700円、共益費1,880円、合計33, 580円でした。

いわばAさんは亡くなって白骨死体になってからも3年間、毎月33, 580円の家賃等を払っていたことになります。これは年間で、402, 960円となり、3年間で120万8, 880円となります。このほかガス代、電気代、水道代も払っていたのです。

警察が白骨死体を運び出したあと、Aさん宅のドアに同じ地区に住む民生委員がメモ用紙を玄関ドアに貼りました。メモ用紙には「家族の方がお見えになられたら電話をしてください」。民生委員〇〇〇〇「電話××××とメモ書きして。

担当民生委員の話、メモ用紙をメモ代わりにして貼り出すと、翌日、Aさんの弟さんから電話をもらって、Aさん宅を訪れました。弟さんと居合わせた妹さんがいうには、亡くなった兄は、5人兄弟で、家庭の事情で離婚して一人ぐらし。「子どもはいるけど、子どもや兄弟姉妹と連絡はいっさいなし。本人は毎日のようにショウチュウをのんでいたようです。この団地にお世話になっていて、いろいろありがとうございました。兄の住んでいる 1DKの合いカギを私がもっていました」。亡くなった兄の弟さんからの電話によると、「兄は変わった人だった。兄貴は親とも縁を切っていました。兄弟姉妹とも長い間、連絡することもなく、音信不通でした」。警察が 1DKで兄を処置する際、弟さんと妹さんが立ち会ったとのこと。

近隣の人の話、「近隣の人とあいさつをするでもなく、こわい人というイメージのひとでした」。弟さんも妹さんも隣の市に住んでいました。

Aさんの死後、国勢調査が行われ、この地区を担当しているTさんから、地区長の中沢へ連絡。Tさんいわく「何回となくヨルもヒルも、Aさん宅では、電気がついているし、メーターが回っているのに、本人が出てこない。どうしょうか」と問い合わせ。まさか亡くなっていると知らず、私はTさんに「仕方がない。Aさんを調査不能で書類を出すしかない」と指示をしました。

ことの経過を知った民生委員、地区社協関係者、自治会役員は、「白骨死体で3年経つ」と知り、みなあ然とするばかりで、事後の対策について、どうしたらいいのか、打つ手がわからないという状況でした。

ところが2002年4月上旬になると、団地１地区で、Bさん（男性、50歳）が亡くなっているのではないか、というウワサが広がっていました。

このウワサを知り、さっそく中沢が船橋の仕事場から電話作戦を開始。4階のBさんの向かいに住む高齢のおばあさんいわく「ベランダの網戸にいっぱいハエがとまるようになっている。どうしたんでしょうか。お隣さんのお父さんを最近見かけないし、変なニオイがするんですよ」。

Bさん下に住むCさんの話、

「Bさんを最近、みかけないですよ。それに変なニオイがするのです。もしかすると・・・」。

Bさん下に住むDさんの話、

「あれは亡くなった時のニオイですわ。それを思うと気味悪くて・・・天井の部屋のスミからムシが落ちてくるような気がして・・・もうここから引っ越ししたいのです」。

同じ階段の人に次々と電話することにより、ある人とこんな会話をしました。「Bさんの奥さんの居場所を知っています」「教えて下さい」「いろいろ事情があって、別居しているのです」「そうですか。自治会としても、相談にのりたい」。

こんな会話があって、Bさんの別居中の奥さんと連絡がとれました。

Bさんの奥さんの話によると、「主人はこたつに入ったまま伏せるようにして亡くなっていました。こたつの回りには、お酒のワンカップやカップラーメンなどがたくさんころがっていました。後始末は便利屋さんに遺体の処理や部屋の消毒などお願いして80万円かかりました。家庭内暴力もあって、子どもを連れて、別居していたのです。私は夜働いて生計をたてていました。主人は会社のリストラで、会社を辞めて、次の仕事をさがしていましたが、思うような仕事が見つからなかった」。

このような家庭の事情をおききして、奥さんと会話しました。「おくさん、ご主人は生命保険に入っていませんでしたか」「若い時に（生命保険に）入ったときききました。が、その証書がどこにあるか知りませんが・・・」「押し入れとか、書類入れの中をよくみて下さい」

（あくる日、奥さんから電話あり）「（保険の証書が）ありました」「どこの支店になっていますか」「〇〇支店です」「よし、私の方から、〇〇支店長に電話して保険金をすぐに出すようにしてもらうから・・・」「お願いします」

（自治会長名で〇〇支店長にお願いして）「奥さん、〇〇支店長に頼んであるから、あす、〇〇支店へ、印鑑とボールペンをもって訪れて下さい」「はい、わかりました」

（翌日の午後、奥さんから連絡が入り、

「（〇〇支店に）いってきました。保険金が2,000万おりました。（苦しかったので）助かりました」「それはよかった。自治会としていろいろ相談にのりますので、がんばってください」。

こんなやりとりをして励ました、という経緯をたどりました。

私たちにとって、この二つの出来事が貴重な大きな経験となり、大きなキッカケとなりました。

これを契機に、団地自治会と団地社協が、役員会や理事会を開いて孤独死の課題について次々と挑むことになりました。

その後の経緯

まず手初めに「孤独死しているようだ」「様子がおかしい」と気づいたら、「早く連絡してもらうこと」を住民に呼びかけました。この連絡システムは「孤独死 110 番」と位置づけ、近隣からの通報を会報「ときわだいら」で広報しました。

この年の7月17日に、常盤平市民センターホールで「第一回孤独死を考えるシンポジウム」を開催。団地住民にことの重大性を訴えました。

この年の対応については、日記ふうにたどると以下の通りです。

平成14年(2002年)

5月～6月	常盤平団地自治会と地区社協で孤独死問題の検討(ネットワーク・システムづくり)を開始、「孤独死１１０番」(通報システム)を公表
7月 17 日	団地自治会と地区社協の共催で[孤独死を考えるシンポジウム](第一回)を開催
9月 30 日	孤独死予防対策:新聞販売店と協定書を締結
10 月 18 日	行政へ孤独死の実態調査を要請
11 月 17 日	読売新聞で「増える高齢者孤独死」と題する特集で「孤独死に対する取り組み」が掲載される
11 月 26 日	孤独死予防対策ネットワーク交流会開催

初めて取り組む「孤独死への取り組み」。やることなすことがすべて初めてのこと。しかし、この問題の対応には住民の理解と協力が必要と直感。翌年(2003年)も8月 18 日に、常盤平市民センターホールで「第2回孤独死を考えるシンポジウム」を開催。つまり孤独死の課題について「みんなで考え、みんなで取り組む」という地域ぐるみの視点に立って推進しました。

その翌年、孤独死の課題に取り組んだ経緯を日記ふうにまとめると以下の通りです。

平成 15 年(2003)年

1月 17 日	県社協から先進事例取材
3月 3 日	県社協の啓発冊子「福祉CHIBA」に孤独死予防対策が特色ある取り組みとして事業紹介
8月 18 日	[孤独死を考えるシンポジウム](第2回)開催
9月 1 日	松戸市から地区在宅介護支援センター事業の一環とする地区高齢者支援連絡事業を地区社協が受託
9月 23 日	地元カギ業者と覚書締結
11月 10 日	千葉県警が14年の県内孤独死は年間616件(50歳以上)と公表
11月 12 日	「福祉よろず相談」開設(毎週水曜日の 10:00～正午) 同時に「テレホン相談」も開設(毎週月～金の 9:00～15:00)
11月 14 日	厚生労働省所管・(財)厚生問題研究所から編集取材
11月 20 日・21 日	山口県で開かれた全社協主催の社協活動全国会議の自由研究発表で「孤独死対策の経緯と教訓」と題して事例発表
12月 20 日	松戸市に対して市内の孤独死実態調査を要請し、市から管内2警察署に調査要請する

平成 15 年(2003年)に至り、本格的に孤独死の課題に挑むこととなり、この取り組みが全国レベルの雑誌やマスコミにも報道されることになりました。私たち自治会や団地社協では、問題を調べるほどに、「奥の深い課題を含む」ことも知りました。つまり「死ぬということは、どう生きるか、という生きかたや暮らし方に関わっている」ことも再認識させられた年となりました。

従って、翌年には、本格的にこの課題に挑むことに。それはすべて初めて経験することばかり。

平成 16 年(2004 年)、この年の 1 月20日に厚生労働省大臣あてに「孤独死の課題」に関する初の陳情を行いました。

松戸市内の孤独死の数が初めて公表されたのも、この年の 2 月 4 日のことでした。その数は「松戸市内年間の孤独死は 90 名」しかも「松戸警察署管内という旧市街地に多い」ということも知りました。

松戸市内の年齢階層別孤独死人数状況

(警察署別)　　平成 18.1.1　～18.12.31(2006 年)

年齢階層	男性		女性		計		
	松戸署	松戸東署	松戸署	松戸東署	松戸署	松戸東署	合計
50～54歳	1	1	0	0	1	1	2
55～59歳	0	7	0	0	0	7	7
60～64歳	5	2	1	0	6	2	8
65～69歳	7	7	1	1	8	8	16
70～74歳	3	6	2	1	5	7	12
75～79歳	3	5	1	2	4	7	11
80～84歳	1	2	4	5	5	7	12
85～89歳	1	0	1	1	2	1	3
90～94歳	0	0	1	0	1	0	1
95歳以上	0	0	0	0	0	0	0
合計	21	30	11	10	32	40	72
全体数	194	106	114	60	308	166	474

年	男性		女性		計		
	松戸署	松戸東署	松戸署	松戸東署	松戸署	松戸東署	合計
平成15年	46	13	16	15	62	28	90
平成16年	43	25	17	10	60	35	95
平成17年	50	17	21	14	71	31	102
平成18年	21	30	11	10	32	40	72

その後、毎年「市内の孤独死」のデータを公表。この年「90 名」から翌年の「95 名」「102 名」と年ごとに増えていたが、2006 年に至ると「72 名」に激減。従来より30%も減少しています。

ちなみに「102」の段階でこのうち30 数%が 64 歳以下の中年孤独死であったことから、NHK スペシャル担当者がこの点を重視して NHK スペシャル番組「団地の一室で・・・・」を放映。グランプリを獲得し、全国的にヒットしました。

この年には、6 月 5 日、松戸市民会館大ホールで、厚労省森英介副大臣を招いて基調講演をもとに、「第 3 回孤独死を考えるシンポジウム」を国、県、市の協力で開催しました。

さらにこの年の 7 月 23 日、常盤平市民センターで、現在の「まつど孤独死予防センター」の開所式を行いました。ここが全国初の「孤独死予防センター」の設置となりました。いわばこの設置により本格的に孤独死ゼロ作戦に挑む第一歩となりました。

都市再生機構とタイアップして団地全戸に呼びかけ「あんしん登録カード」を実施したのもこの 8 月でした。この年から、全国紙が全国版に孤独死への取り組みを本格的に報じるようになりました。このように広がりを示すことにより「孤独死」と呼ぶ表現も定着しました。どの新聞もテレビも雑誌も「孤独死」と書いており現在に至っています。

この年の経緯を日記ふうに記したのが以下の通りです。

平成 16 年(2004)年

1 月 20 日	坂口厚生労働大臣に「孤独死の課題」に関する陳情を行い、 渡辺博道衆議院議員の紹介で森英介副大臣に直接陳情 同時に同省記者室で陳情内容説明
2 月　4 日	平成 15 年の市内の50歳以上の孤独死は年間90件と松戸・松戸東両警察が公表。　同時に松戸記者会でデータを説明し各紙で報道される
2 月 20 日	千葉県地域福祉支援計画に「孤独死対策」を盛りこむよう要請
3 月 31 日	厚生労働省啓発パンフレット「お年寄りがひとりぼっちで死なないように(A4. 16頁)孤独死に対する取り組みが掲載される
4 月　1 日	千葉県地域福祉支援計画に「孤独死対策」が掲載される
6 月　5 日	森英介厚生労働副大臣を招き市と市社協共催により市民会館大ホールで「孤独死を考えるシンポジウム2004」開催 森副大臣の基調講演とシンポジウムに 1,003 名の参加者を数える
7月 1 0 日	地区社協と都市機構(住都公団)と共同で作成した, 「あんしん登録カード」記入の呼びかけ開始
7月 2 3日	孤独死対策サマーセミナーを常盤平市民センターホールで開催, 同時に「まつど孤独死予防センター」開所式を行う
7月～	県社協の「21世紀菜の花コミュニティプラン」に常盤平団地地区社協が取り組んでいる「孤独死対策」が掲載される
8月 17 日	松戸記者会に「あんしん登録カード」について発表し各紙が報道
9月　7　日	毎日新聞に「10 戸で階段委員会」と題する特集記事が掲載
9 月 22 日	「東葛まいにちに」孤独死をなくす取り組み特集記事が 1 面に掲載

9 月26 日	朝日新聞に「一人にさせない決意～9千人の見守り作戦～」と題する特集記事が全国版に掲載される
１2月　8日	あんしん登録カード登録者が12月8日現在で301件となる。そのカードがその後、370枚となる
１2月１６日	毎日新聞社会部（大阪）取材（関連記事：12/30 付朝刊に掲載）
１2月１７日	NHK社会部が午前10時から終日取材。この日、72歳男性の孤独死が発生し、孤独死を「即日発見・対応」する
１2月 30日	毎日新聞朝刊に「公助を問う（阪神大震災10年）～孤独死をなくす自衛策」と題する特集記事が掲載

孤独死ゼロ作戦の一環として、平成19年4月15日、団地内中央商店街の一店舗を貸りて「いきいきサロン」をオープンしました。これは都市機構にとって初の決断であり、前例のないことでした。

この「いきいきサロン」は年間360日の営業であり、約30名の理事等による有償（1時間200円）ボランティアで世話人をつくり運営しています。

店舗家賃の月額は「自治会3万円」「団地社協3万円」が負担。多くの人が利用して好評です。これも全国初の試みとなりました。このサロンの規則は以下の通りです。

いきいきサロン運営規則

いきいきサロン運営の適正化を図るために、この規則を定め、いきいきの魅力づくりに努めることとする。

第一条　いきいきサロンは、有償ボランティアの世話人が日々運営に当たることとする。
世話人は一日二人体制で担当する。

第二条　運営の適正化を共有し、円滑な運営を図るために、二か月に一回のわりあいで世話人会議を開く。

第三条　世話人会議は団地社協会長が招集する。

第四条　いきいきサロンの営業時間は、原則として午前11時から午後6時までとする。
但し、寒気の季節（11月から翌年3月の間）は午前11時から午後5時までとする。

第五条　いきいきサロンの入室料は一人100円とする。但し2階利用の団体については、このほか別途利用料を300円とする。

第五条　いきいきサロン内では、禁煙、禁酒とする。また、飲酒を伴う来訪者については退室を求めることができる。

第七条　いきいきサロン内では、来訪者に対して、無料でコーヒー、お茶などを提供する。
このほか、弁当などの持ち込みは来訪者の自由とする。

第八条	サロン内では、音楽の演奏など楽しいミニ催しなどを開催できる。
第九条	サロンの運営等に課題が生じた際には、世話人相互で連絡しあい、団地社協理事会で解決の道を示す。
第十条	この運営規則は平成19年11月1日から施行する。

この間、冊子『孤独死の課題に挑む』(①②)、冊子『地域フォーラム』、冊子『孤独死の課題に挑む』(③④)、冊子『孤独死の課題に挑む』⑤⑥、冊子『講話集』をつくり、有効に活用しました。

さらに今年の12月10日、常盤平市民センターホールで「孤独死ゼロ作戦」を考えるフォーラム2007を開催へ。

このような経緯を経て、孤独死の課題が全国的に注目されるようになって、平成17年(2005年)1月19日、自治会長として初めての「孤独死の講演」依頼が寄せられました。お招きくださったのは名古屋市でした。この日、名古屋市内にある熱田文化会館で孤独死対策の事例発表を行いました。中沢のほか7名の団地社協理事も参加。その後、講演依頼が相次ぎ寄せれ、これを契機に北は札幌、南は北九州市に至るまで、全国各地から「中沢講演会」が行われました。その後も「講演」「事例報告」の依頼がつづき、平成19年10月現在でその数24回に及びました。なかでも江戸川大学福祉専門学校と船橋市中央公民館および滋賀県は2年間に2回にわたり「中沢講演会」を開催しました。

平成19年度の9月からの「講演」または「事例報告」は以下の通りです。

中沢理事の「講演」「事例報告」の開催日程

(平成19年11月31日現在)

1. 9月22日(土) 江戸川大学総合福祉専門学校(公開講座兼ね)
2. 10月17日(水) 船橋市中央公民館
3. 10月21日(日) 白井市役所
4. 11月7日(水) 神戸文化ホール
5. 11月9日(金) 厚生労働省「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」参考人報告
6. 11月16日(金) 日本女子大学(授業の一環)
7. 12月24日(土) 私学会館(孤独死を考えるシンポジウム)
8. 12月11日(火) 厚生労働省「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティーづくり推進会議」
9. 12月17日(月) 千葉県社会福祉協議会によるシンポジウム(パネリスト中沢卓実)
10. 12月21日(金) 淑徳大学(授業の一環)
11. 2月1日(金) 東京23区研修所
12. 2月2日(土) 名古屋シンポジウム
13. 2月16日(土) 北九州市保健福祉局(14:00～)
14. 3月14日(金) 君津市公民館(午前講演、午後分科会)
15. 4月19日(土) 愛知県安城市(講演会)

上記のデーターにも記してあるように、厚生労働省から11月9日と12月11日の2回にわたり「報告依頼」を受け対応しました。このようなことは初めてのことでした。

「事例報告」等のうち11月7日、神戸文化ホールで開かれる際の「中沢報告」及び11月9日、厚生労働省「研究会」での「中沢報告」の骨子は以下の通りです。

神戸文化ホール(大ホール)での「中沢報告」

事例報告「常盤平団地における『孤独死ゼロ作戦』の取り組み」

千葉県松戸市 常盤平団地 自治会会長 中沢 卓実 氏

1．教育の分野にも広がる孤独死の課題
- 江戸川大学福祉専門学校における授業と今回の福祉フォーラム
- 文科省が聖徳大学に委託した「孤独死の調査研究」
- 日本女子大学で講演(11/16)
- 淑徳大学で講演(12/21)

2．国際的な広がりをみせる傾向
- 韓国MBCテレビで放映
- イギリス『ザ・ガーデアン』紙に掲載(4/17)
- ロイター通信取材ずみ

3．なぜこんなに孤独死の課題が広がるのか
- 社会的な背景
- 住民主導で初の事例
- 地域福祉の重要な課題
- 孤独死の事例から学ぶ
- 国も〝小さな扉開く〟

4．常盤平団地における孤独死ゼロ作戦の取り組み
- 孤独死を考えるシンポジウムの開催
- 孤独死１１０番
- まつど孤独死予防センター
- 孤独死の早期発見・早期対応（安否確認等）
- 「向こう三軒両隣」呼びかけ（通報とあいさつの推進等）
- 会報「ときわだいら」等の定期発行
- その他（リーダーの役割）

5．「いきいきサロン」の開設
- 公団店舗で初の試み
- 明るい表情に変化（人の和、地域の和）
- 団体で見学者
- 知り合い仲間づくりの拠点